

# 僕の叔父さん

上田義之

お葬式の後で、僕は叔父さんと初めて会った。

「透くん、初めまして。僕が芹沢暁彦（せりざわあきひこ）だよ」

叔父さんはにっこり笑ってそう言いながら、僕の頭を撫でた。

「今日からきみは僕の家で暮らすんだよ。……さあ、一緒にお家に帰ろう」

僕は叔父さんに手を引かれて歩いた。僕は何度も振り返り、見慣れた街の様子をしっかりと目に焼き付けた。叔父さんは僕に聞いた。

「誰か見送りに来るの？それとも挨拶したい友達がいるのかい？」

僕は首を振る。友達も誰も見送りになんて来ない。大好きだった学校の先生には昨日さよならを言ったし、住んでいた家にももう何も残っていない。

「ここからバスに乗って30分くらいかな」

叔父さんの家は隣町にあった。今まで住んでいた街より少し小さい町だ。

「小学校の転入手続きも取ったから、来週からはこの学校に通うんだよ？」

バスの窓から見えた学校は真っ暗で少し怖かった。

ガタゴトと坂道を登ったり降りたりして、バスは隣町に着いた。そこからまた少し歩いて、ようやく叔父さんの家にたどり着いた。

町はずれの古ぼけたアパートで、その2階の端の部屋が叔父さんの家だった。

「狭いけど、もう少ししたら広い部屋に引っ越す予定だから、それまで我慢してね」

頭を掻きながら叔父さんはそう言って微笑んだ。

僕の名前は北浦透（きたうらとおる）、小学5年生。母さんと父さんは交通事故で亡くなって、僕は一人ぼっちになってしまった。家のことやお金のことやお葬式の手配は全部、父さんの友達だった弁護士のおじさんがやってくれた。叔父さんに僕を育ててくれるよう頼んだのもそのおじさんだ。よく分からないけれど、僕が成人するまでお金の管理をしたりする人にも叔父さんはなっているらしい。

叔父さん、と呼んでいるけれど、僕と叔父さんには血の繋がりはない。僕の母さんの妹の旦那さんだった人だ。妹の貴子叔母さんも2年前に病気で亡くなっていて、僕の親戚は叔父さんだけになってしまった。だから今日のお葬式もとても寂しいものだった。

叔父さんのことはまだよく知らない。仕事も、どんな生活をしているのかもちっとも聞いたことがなかった。でも、今日話してみて、優しそうな人だってことは分かった。

家に着いてほっとしたせいか、お腹が鳴った。

「ああ、お腹が空いたのかい？ちょっと待っててね」

叔父さんはくすっと笑いながら台所に行った。

少しして出てきたのはオムレツだった。

「透くんの口に合うかは分からないけど、食べてみて」

僕は一口スプーンですくって食べた。ふんわりした卵が口の中でとろけた。

「とっても美味しいです」

僕の返事に、叔父さんは嬉しそうに笑った。

叔父さんと暮らし始めていろんなことがだんだん分かってきた。

叔父さんは29歳で、貴子叔母さんが亡くなってから今まで一人暮らしをしていた。料理も洗濯も掃除も何でもできるし、子供好きなのか僕にもいつも優しくしてくれる。たまに僕が寝る前に本を読んでもくれたりもする。叔父さんの声はとても柔らかく落ち着いていて、僕はすぐにぐっすり眠ってしまう。叔父さんも一緒になって寝ちゃうことも多かったみたいだけれど。

叔父さんは大抵家にいる。なんでも、探偵という仕事をしているのだそうだ。探偵と言っても、テレビで見るようなカッコいい仕事じゃない。犬や猫を探してくれとか、結婚相手の身元調査とかそんなものばかりだ。僕が学校から帰ると時々知らない人が家にいたりする。外で遊んでおいでと言われることもあるけれど、大体は叔父さんが座っているソファに並んで座って、叔父さんがにこにこしながら「甥っ子の透です。訳あって預かっているんです」とその人に紹介するのが黙って聞いている。

学校にも慣れて、新しい友達もたくさんできた頃の土曜日のことだ。

家に来た手紙を読んでいた叔父さんは急に怖い顔をして立ち上がった。せかせかと部屋の中を歩き回って、何か考え事をしているようだった。

「透くん、僕はちょっと出かけるけど、一人でお留守番できるかい？」

僕が頷くと叔父さんはにっこりして僕の頭を撫で、それからコートを羽織って出ていった。

いつもにこにこしている叔父さんが、なんで急に怖い顔になったのか、僕はその訳が知りたかった。一人になった僕はさっき叔父さんが読んでいた手紙を探した。でも、持って行ってしまったのか見つからなかった。その代わりに、叔父さんの使っている机の抽斗の奥に写真を見つけた。貴子叔母さんと叔父さんが一緒に写っている写真だ。

叔父さんと叔母さんが結婚したのは僕が小学校に入る前の年だったから今から5年位前だ。結婚式には僕も出席したと思うんだけど全然覚えていない。貴子叔母さんは確かまだ20歳くらいだったと思う。僕の母さんにとってもよく似た小柄できれいな人で、僕の家は何度も来たことがある。勉強を教えてくれたり、洋服を買ってもらったりもした。

叔母さんのことを思い出すうちに、母さんや父さんのことも思い出してすごく悲しくなってきた。叔父さんと一緒の時は思い出さないようにしていたのに。一人ぼっちで、悲しくて寂しくて、涙がどんどん出てきた。

叔父さんが帰ってきた時も、僕はまだメソメソ泣いていた。叔父さんはびっくりして駆け寄ってきた。

「どうしたんだい？一人で寂しかったの？」

叔父さんに抱きついて僕はますます泣きじゃくった。

「僕の好きだった人はみんないなくなっちゃった……きっと僕がいけないんだ！僕がお利口にしていなかったから、神様が僕の好きな人をみんなどこかに隠してしまったんだ……」

泣きながらそう言うと、叔父さんはしゃがみこんで僕の肩に手を置いた。

「透くんのせいじゃない。誰のせいでもないんだ。きみのお母さんもお父さんも貴子も……遠い空からきっときみを見てくれる。それにきみは一人ぼっちじゃない。僕がいるだろう？透くんは僕が嫌いなのかい？」

僕は首を振った。叔父さんは僕の顔をじっと見つめて優しく言った。

「神様がきみの好きな人を連れて行ったとしたら、僕もいなくなっちゃうってことになるだろう？でも僕はここにいる。大丈夫、僕はどこにも行かないし、きみが大人になるまできみの傍にいるからね？……そうだ、透くんにこれをあげよう」

叔父さんはコートのポケットから取り出したものを僕の掌に置いた。

「これは貴子がしていた指輪だよ。僕には小さすぎて付けられないし……これを持っていたらきっと貴子が透くんを見守ってくれる。そう思ったらもう寂しくないだろう？」

僕の涙をハンカチで拭きながら叔父さんはにっこり笑った。僕は大きく頷いて、掌をぎゅっと握り締めた。

その夜一緒のベッドに横になって叔父さんに本を読んでもらった後、僕は手紙のことを尋ねた。叔父さんはちょっと躊躇ってから、遠くを見るようにして話し出した。

「……僕が探偵を始めたのは、まだ貴子と出会う前、僕が大学を出たばかりの頃だった……」

まるで物語の続きを語るみたいに、叔父さんの声は穏やかだった。

……その話が途方もない大事件の幕開けになるなんて、その時の僕には少しも分かっていなかった。そして、叔父さんがとても大きな秘密を抱えていたことも……。

「大学の時の先輩と一緒に探偵をやらないかと誘われて始めたんだ。共同経営という形でね。その人は麻生拓也（あそうたくや）さんという人だったんだけど……ある事件がきっかけで、1年後に突然失踪してしまったんだ。……今日届いた手紙は、大学の頃の友達からのもので、その麻生さんを最近見かけたと言うんだ……それも、この町のすぐ近くで……」

叔父さんは僕の頭をゆっくり撫でながら、ちょっと言葉を切って僕を見つめた。

「それで友達が見かけたと言う場所に行ってみたんだ……でも、麻生さんの手掛かりを掴むことはできなかった……。麻生さんが失踪して今年で6年だから、あと1年で失踪宣告が出されて死亡したと見なされてしまう。……その前に僕は麻生さんを見つけ出したい。……麻生さんにどうしても聞きたいことがあるんだ……」

そう言って叔父さんは僕に布団をかけ直し、優しく微笑んだ。

「透くんにはちょっと難しかったかな？」

僕は首を振った。叔父さんの話はなんとなく分かった。でも、『ある事件』というのは一体どんな事件だったんだろう。そして、麻生さんという人はどんな人だったんだろう。叔父さんにもっと詳しい話を聞きたかったけれど、叔父さんはその話をあまりしたくないように見えた。それに……なんだか叔父さんが遠くに行ってしまうような気がして、僕は急に不安になった。

僕はベッドから出ようとする叔父さんのパジャマの裾を掴んだ。

「どうしたんだい？」

叔父さんは再び僕の隣に横になった。

「……叔父さんはどこにも行かない？」

おそるおそる聞いた僕に叔父さんはにっこり笑って言った。

「どこにも行かないって、さっきも言ったろう？」

「でも……麻生さんみたいに……突然いなくなったりしない？」

「しないよ」

「僕が大きくなるまで？」

「うん」

「約束して」

布団の中から手を出して小指を立てると叔父さんも小指を出した。指きりげんまん……叔父さんと一緒に歌って安心した僕は、やっと叔父さんのパジャマを離れた。

「透くんが眠るまでここにいてあげるから、ゆっくりお休み？」

叔父さんはそう言って、布団の上から僕の胸の辺りをとんとんと叩くようにした。

僕は頷いてゆっくり眼を閉じた。

次の日の日曜日、叔父さんは僕を遊園地に連れて行ってくれた。前に母さんや父さんと一緒に来たことがあった。その時は身長が低いからと乗せてもらえなかった乗り物があったけど、今度は大丈夫だった。

叔父さんと一緒にたくさんの乗り物に乗った。叔父さんはお弁当も作ってきてくれた。鮭の入ったおにぎりに、唐揚げと卵焼き、りんごにバナナも入っていた。僕は楽しくて嬉しくて、また泣きそうになった。だってこんなに楽しいことがあるなんて思ってなかったから。

一人ぼっちになった僕には、もう楽しいことなんてある訳がないと思ってた。学校で友達と遊んでいても、あまり楽しいとは思えなかった。それよりは図書館で本を読んでいた方がよっぽど楽しかった。でも、本を読むよりも、何よりも、叔父さんと一緒に遊園地に来て遊ぶのはもっとずっと楽しかった。叔父さんもいつもよりにこにこして楽しそうだった。

「また来ようね」

叔父さんは帰りにそう言ってくれた。

「うん！」

僕も嬉しくなって大きな声で返事をした。

月曜日、学校から帰る途中に、変な人がいた。ねずみ色の長いコートを着て同じ色の帽子を被りマスクをした人だ。マスクをしている人はたくさんいるからおかしくはないんだけど、その人は背は高いのに、猫背で右脚を少し引き摺るようにして歩いていた。それに、最初は僕の前を歩いていたのに、急に立ち止まって、僕を先に行かせてそれから後ろをついてきた。僕は少し怖くなって、途中から走って家に帰ってきた。

叔父さんは家にいなかった。

窓から下を見てみると、さっきの変な人が電柱の後ろからこっちの方を見ている。僕は慌ててカーテンを閉めた。

ドキドキしながら窓際にうずくまってじっとしていると、玄関のドアが開く音がして、「ただいま」と叔父さんの声がした。

「今日の夕食は透くんの大好きなハンバーグだよ」

「叔父さん！」

僕は玄関に走って行って叔父さんに抱きついた。

「変な人が！変な人が外にいる！」

「変な人？」

僕は叔父さんの手を引っ張って窓の傍に連れてきた。

「電柱の影からこっちを見てる！」

叔父さんはカーテンの隙間からそっと外を覗いた。

「……誰もいないよ？」

「えっ！？」

僕はカーテンを開けてみた。電柱の後ろには誰も隠れていなかった。

「本当にいたんだ！ねずみ色のコートを着てマスクをした人が」

僕は叔父さんに言った。

「学校の帰りに僕の後をつけてきて……怖くて……」

叔父さんは僕の肩に両手を置いて優しく諭すように言った。

「近所に住んでいる人かもしれないよ？……僕が変な話をしたから、普通の人の変な人に見えてしまったのかもしれないね……」

そう言われると確かに、もしかしたら近くに住んでいる人で、足が悪くて僕に歩く姿を見られたくなくて先に行かせたのかもしれないとも思えてきた。



「.....でもとっても怖かったんだ.....猫背で足を引き摺って歩くところが.....」

僕がそう言うと、叔父さんは急に眼を大きく見開いて僕の肩をぎゅっと掴んだ。

「透くん！今何て言った？」

「え.....猫背で足を引き摺って歩いてたって.....」

叔父さんは肩を掴んでいた手を離すと、せかせかとした様子で部屋の中を歩き出した。

「.....その引き摺っていた足は.....右足だったかい？」

「うん」

「.....そうか.....」

叔父さんは尚も何か考えているようだった。

それからふと僕の視線に気付いたのか、僕の傍に戻ってきて真剣な顔で言った。

「きみの見た人は.....麻生さんかもしれない。.....彼も右足を引き摺って猫背で歩く癖があったんだ。.....透くん、もしまたその人を見かけたら、すぐに僕に教えてくれ」

僕は頷いた。叔父さんにもっこりして頷いた。

その夜、トイレに行きたくなって目が覚めた。

いつもは叔父さんが隣に寝ているのに、なぜか今は寝ていなかった。トイレに行って台所から明かりが見えているのに気が付いて覗いてみた。叔父さんがテーブルに突っ伏していた。

そっと近寄ると、叔父さんはお酒を飲んで寝ているようだった。

「叔父さん、こんなところで寝てると風邪ひいちゃうよ？」

僕は叔父さんのパジャマを引っ張った。

「ん.....ああ.....」

叔父さんは寝呆けたような返事をしながらよろよろと立ち上がった。ふらついている叔父さんは危なっかしくて、僕は手を繋いで寝室に行き、一緒にベッドの上に横になった。

突然、叔父さんが僕をぎゅっと抱き締めた。僕はびっくりしたけれど、あったかくて気持ちいいなんてちょっと思った。

「.....貴子.....」

叔父さんはそう呟いて、抱き締めたまま僕の胸の辺りに顔を押し付けてきた。

もしかしたら叔父さんも寂しいのかもしれない。だって叔父さんも.....一人ぼっちだもの。

僕はいつも叔父さんにしてもらいたいように、叔父さんの頭をゆっくり撫でた。首や胸元にかかる叔父さんの温かい息を感じながら、何度も何度もゆっくり撫でた。

それから何日か経つと、学校で変な人の噂が広まった。学校帰りに見かけたという人が僕の他にも何人もいたらしく、その変な人はいつの間にか『ねずみ男』という名前と呼ばれるようになった。噂では、男に近付くと急にコートの前を広げ、その中にはたくさんのナイフや包丁が付いていて、「お前を切り裂くのはどのナイフがいい？」と言いながら追いかけてくる、なんていう尾ひれまでついてた。だけど、もしかしたらそれが麻生さんという叔父さんの友達かもしれないということが僕の頭にひっかかっている、友達と一緒に『ねずみ男』の噂をするのはなんだか嫌だった。それに、その人はあの日以来僕の前に姿を現さなかった。僕の後をついてきたら、今度は絶対叔父さんに教えてあげようと思っているのに。

叔父さんも1回だけその人を見たそう。追いかけたけど、どこかに逃げ込んだらしくて話をすることはできなかつたらしい。

それにしても、麻生さんは6年前どうして急にいなくなってしまったのだろう。そして、なぜ今になってこの町に現れたのだろう。叔父さんに何か話があるのなら、会いに来てよさそうなのに、逆に逃げてしまうなんてなんだか変だ。叔父さんも麻生さんに聞きたいことがあると言っていたけれど、それは一体どんなことなんだろう。考えれば考えるほど、分からないことだらけだった。

でも、それを叔父さんに聞くのは怖かった。怖い、というのは……しつこく聞いたら叔父さんに嫌われるんじゃないか、ということが怖かった。僕には叔父さんしか頼る人がいない。叔父さんに嫌われたら、僕は行くところが無くなってしまふ。そう思うと、麻生さんのことも叔父さんのことも、知りたいことを何一つも聞けなかった。叔父さんもそれ以上言いたくないような素振りだったからなおさらだ。

だけどその後で僕はそのことをものすごく後悔する破目になる。だってそれは……とても重要なことだったから……。

僕はその日、学校帰りに公園に寄って3人の友達と遊んでいた。

すると、いつの間にそこにいたのか、木陰に隠れるようにしてこっちを見ている『ねずみ男』に気が付いた。友達の1人が同じように気付いて「ねずみ男だ！」と大声で叫んで逃げ出した。他の2人も慌てて転げるように走っていった。

公園には僕と『ねずみ男』だけになってしまった。僕も逃げたかったけれど、足がすくんで動けなかった。

『ねずみ男』は木陰から出てきた。片脚を引き摺って、僕の方へまっすぐ歩いてくる。帽子とマスクのせいで、顔は全然見えなかった。ゆっくり近付いてくる『ねずみ男』が怖くて、僕はその場にうずくまった。

『ねずみ男』は頭を抱えてしゃがみこんだ僕の前に来ると、コートのポケットに入れていた手を出した。その手にはハンカチのようなものが握られていて、それが不意に僕の鼻先へ押し当てられ甘ったるい香りがしたと思ったら急に目の前が真っ暗になってしまった。でもその時耳元で『ねずみ男』が確かに「……貴子……」と囁くのを僕は聞いたような気がした……。

目が覚めた時、そこはどこだか分からない部屋の中だった。薄暗くて眼をこらしてやっと部屋の中の様子が見えてきた。部屋の壁際にベッドが置いてあって、その反対側には小さい机がある。出入り口のドアが正面にあって、僕は椅子に腰かけた格好で手足をその椅子に縛り付けられていた。背負っていたはずのランドセルはどこにも見当たらなかった。

「誰か！助けて！！」

僕は叫んだ。がたがたと身体を揺すってみたけれど、椅子がちょっと動いた程度だった。

すると正面のドアが開いた。

「ああ、貴子、やっと目が覚めたね……」

『ねずみ男』がそう言いながら右足を引き摺って部屋の中に入ってきた。部屋の中なのに帽子もマスクもコートもそのまま、手には銀色のトレイを持っていた。

「お腹が空いただろう？こんなもので悪いが我慢しておくれ」

『ねずみ男』はトレイを小さい机の上に置いた。菓子パンと牛乳パックが見えた。

「おじさんは……麻生さんという人なの！？」

僕は怖いと思うことも忘れて叫んでいた。

「なんでこんなことするの！？僕をお家に帰して！！」

『ねずみ男』の表情は部屋の中が暗い上、マスクに隠れてちっとも分からない。

「貴子……なんでそんな悲しいことを言うんだい？」

『ねずみ男』はなんとなく悲しそうな声で言った。

「僕は貴子叔母さんじゃない！！北浦透だもん！」

「そんなはずはない……お前は6年前とちっとも変わっていないよ。その眼もその唇も……私が愛した貴子だ……」

『ねずみ男』はそう呟くと、僕の縛られている椅子の後ろに回り込んだ。そうして椅子を持ち上げるとガタガタと動かして小さい机の前に運んだ。

「さあお食べ……」

僕は『ねずみ男』を睨んだ。

「両手が使えないのに、食べられるわけがないじゃないか」

「ああ、そうだったね」

縛った手をほどいてくれるのかと思ったけれど、『ねずみ男』は僕の前に置いた菓子パンの袋を破り、パンを千切って僕の口元に持ってきた。

僕は口を大きく開けて、パンと一緒に『ねずみ男』の指に噛みついた。

「ぎゃっ！！」

『ねずみ男』は叫び声を上げて僕を椅子ごと突き飛ばした。僕は床に頭と肩と膝をぶつけて痛かったけど、『ねずみ男』も相当痛そうに噛まれた右手の中指を庇いながらのろのろと椅子を元の状態に戻した。中指には僕の歯型がくっきりと赤く付いていた。

「……貴子……そうか……そんなに私が憎いのか……」

「だから、僕は貴子叔母さんじゃないってば！！貴子叔母さんは死んだんだ！！2年前に！」

僕がそう言うと、『ねずみ男』は突然帽子の上から頭を押さえて唸りだした。

「……うう……死んだ？……貴子が？……ううっ……貴子！……貴子！」

狂ったようにその場をうろうろと歩き回り、何度も貴子叔母さんの名前を呼んだ。そうして急に僕の方を向くと、僕の服の胸元を左手でぐいと掴んだ。

「ふん……そんなことで私を騙せると思っているのか？この嘘つきめ」

「う、嘘じゃないもん！」

「お前は貴子だ。……なんでそんな嘘をつくんだ？この6年でお前は……変わってしまったのか？」

帽子の下の眼は血走って、ぎらぎらと光っていた。

「貴子……お前はもう私を愛してはくれないのか？」

さっきから『ねずみ男』は貴子叔母さんを愛していたとか言ってるけど……貴子叔母さんと結婚したのは叔父さんだ。……それとも……叔父さんと結婚する前に貴子叔母さんは麻生さんと付き合っていたんだろうか。

「麻生のおじさんは……貴子叔母さんのことが好きだったの？……6年前に一体何があったの？」

服を掴んだ『ねずみ男』の手がびくりと震えた。

「麻生のおじさんと……貴子叔母さんと……暁彦叔父さんの間に何があったの？」

『ねずみ男』は僕の質問に答えようとはしなかった。ただもぞもぞとマスクの下で呻くように呟いた。

「貴子……あいつだけは許さない……私からお前を奪ったあの男だけは……」

そうして、コートのポケットをまさぐってさっきのハンカチを取り出すと、再び僕の鼻と口を塞いできた。

「やめて！」

そう叫んだつもりだったけれど、すぐに眼の前が真っ暗になってしまった。

次に眼を覚ました時、僕は家のベッドに寝ていた。ベッドの傍には叔父さんがいて、心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。

「良かった……透くん、気が付いたんだね」

叔父さんは僕の頭を撫でながら、ほっとした顔をした。

「叔父さん……僕……」

「もう大丈夫、怪我もしていないし、安心していいんだよ」

優しく言う叔父さんの顔を見たら、涙が出てきた。

「麻生のおじさんは……？」

「うん……僕があの家に行った時には誰もいなかった……」

叔父さんの話によれば、逃げた3人の友達が公園に戻ってみると、僕が『ねずみ男』に抱えられて連れていかれるところだったらしい。友達の1人が叔父さんに知らせに走り、あとの2人は『ねずみ男』をこっそり追いかけた。途中で見失って、追いついた叔父さんに見たことを教えた。叔父さんは前に『ねずみ男』を見かけたところに近かったので、その辺りに住んでいるに違いないと見当を付けてしらみつぶしに探し回った。そして、1軒の家の前に落ちていた貴子叔母さんの指輪を見つけた。いつも僕がポケットに入れて持ち歩いていたのを知っていたから、その家に違いないと思った叔父さんは窓に石を投げてみた。でも何の反応もなく、叔父さんはその窓を破って中に入った。そうしてベッドに寝かされていた僕を発見したというわけだ。

「透くんが無事で本当に良かった……きみに何かあったら……義兄さんや義姉さん、貴子にも顔向けできないよ……」

叔父さんはベッドに肘を着いて両手で顔を覆った。僕はその瞬間、心臓をわしづかみにされたみたいにドキッとした。だって……叔父さんの右手の中指には、大きな絆創膏が巻かれていたんだ……。

「お、叔父さん……その指……どうしたの？」

おそろおそろ聞いた僕に、叔父さんは右手を振りながら微笑んだ。

「ああ、さっきあんまり急いで出たからドアに挟んじやったんだよ。そそっかしいよね」

叔父さんが「ゆっくりお休み」と言って隣の部屋に行ってしまった後も、僕はドキドキが治まらなかった。

叔父さんが……『ねずみ男』なの？

その右手の中指の絆創膏は……本当にドアに挟んだものなの？

考えると二人は確かに背格好が似ている気がした。『ねずみ男』は叔父さんより背が低く見えたけど、叔父さんが猫背になったら同じくらいになるかもしれない。『ねずみ男』の声はマスク越しでちょっとくぐもった感じがして、はっきりと違う声だとも言えなかった。それに……叔父さんと『ねずみ男』が一緒にいるところを僕は見ていない。最初に見た時だって、家に叔父さんはいなかった。叔父さんも『ねずみ男』を見たと言ったけれど、それだって叔父さんが言うだけで本当かどうか分からない。麻生さんという人の話だってそうだ。そもそも麻生さんは本当に実在する人物なのだろうか。……叔父さんの言うことを全部信用してしまっているのだろうか。

僕は布団の中で慌てて首を振った。

……帽子の下から見えた『ねずみ男』の目は、いつもの叔父さんとは全然違う怖い目だった。

いつも優しい叔父さんがあんな目をするなんて、僕にはどうしても思えない……。

『ねずみ男』は僕を誘拐してどうするつもりだったんだろう。縛られてはいたけれど、特に乱暴に扱われた訳じゃなかった。ちゃんとパンも食べさせてくれようとしたし……噛みついた後だって、僕に何かすることもなく椅子をきちんと元に戻している。僕が見つかった時もベッドに寝かされていたと言うし……。

僕を貴子叔母さんと混同しているようなふしもあった。僕は母さん似だから、当然貴子叔母さんにも似ている。叔父さんの机の中にあつた貴子叔母さんの写真は……まだ20歳になる前のものだと思うけれど、僕が髪を伸ばしたらこういう風になるのかもと思うくらいよく似ていた。

もしも……『ねずみ男』が叔父さんだとしたら……貴子叔母さんが亡くなったことは知っているはずだし、僕のこと北浦透だと知っているはずだ。それなのに、『ねずみ男』はまるで知らないことみたいに言っていたし、何度も僕を貴子と呼んだ。

……叔父さんは『ねずみ男』なんかじゃない。

僕はそう心の中で呟いた。

それは僕の願いのようなものだった。

その夜中、かなり遅い時間になってから叔父さんが僕の隣に横になった。叔父さんは僕が寝ていると思っていたみたいで、声をかけたら驚いていた。

「なんだい、透くん、まだ眠っていなかったの？」

「うん……考え事をしていたら眠れなくなっちゃったんだ」

「そうか……まああんなことがあった後だから仕方がないけど」

叔父さんは苦笑いして僕に腕枕をしてくれた。

「叔父さん……貴子叔母さんは叔父さんと結婚する前に、麻生さんと付き合っていたの？」

叔父さんは一瞬びっくりしたような顔をして僕を見た。

「どうしてそんなことを聞くんだい？」

「だって……」

僕は言い出そうかどうしようか少し迷ったけれど、やっぱり言うことにした。

「『ねずみ男』につかまっていた時に、あいつはずっと僕を貴子って呼んでたんだ。……それに、それだけじゃなくて……貴子を愛してたって言った」

僕がそう言うと叔父さんは悲しそうな顔をして、僕をぎゅっと抱き締めた。

「叔父さんと叔母さんと麻生さんの間に……何があったのって聞いたけど……それには答えてくれなくて、ただ貴子を奪ったあいつだけは許さないって……」

叔父さんは僕を胸に抱き締めて、髪を撫でながらそっと呟いた。

「……透くん、ごめんね、辛い思いをさせてしまって」

確かにあの時は怖いと思ったけれど、今は叔父さんの方が辛そうだった。

「きみにはきちんと話しておくべきだったね。僕と貴子、そして麻生さんのこと……」

ゆっくりと、叔父さんは言葉を続けた。

「……麻生さんが貴子を好きだったのは僕も知っていた。貴子はとても可愛くて、聡明で、貴子を知っている人達はみんな貴子が好きだったんだ。……きみも大好きだっただろう？」

「うん……」

僕は叔父さんの腕の中でこくんとうなずいた。

「麻生さんはみんなの中でも一番貴子を好きだったのかもしれない。……だけど貴子は麻生さんじゃなく、僕を好きだと言ってくれたんだ……だから僕たちは結婚した。でもそれから麻生さんはおかしくなった。仕事もしないで何も言わずにふらりとどこかに出掛けることが多くなって、僕にも何も話してくれなくなってしまったんだ。……最初は、単に嫉妬しているんだと僕も貴子もあまり深く考えていなかったんだけど……そのうちに麻生さんは貴子にまわりつくようになってしまった。ストーカーになってしまったんだよ……」

「ストーカー？」

「うん……僕が仕事で家を空けている時に貴子の様子を覗いていたり、出掛ける時に後をつけたり……だんだんそれがひどくなってきて、貴子もノイローゼのようになってしまった……。それで僕は麻生さんにきっぱり、貴子の周りをうろつくのはもうやめてくれと言ったんだ。生まれて初めて人を殴ったよ。……そうしたら、それっきり麻生さんは行方不明になってしまった……」

警察にも捜索願いを出したけれど、逆に僕が麻生さんをどうかしたんじゃないかと疑われたりもした。だって最後に麻生さんと一緒にいたのは僕で、それも大声で喧嘩してたんだからね……」

叔父さんはふうっと大きく息を吐いて、僕の顔を上げさせた。

「だからどうしても僕は麻生さんに会いたい。……麻生さんがちゃんと生きていることを証明して、僕がどうかしたとかいう疑いを晴らしたい……それに……貴子のこと聞きたいんだ……本当に、貴子を愛していたのか……」